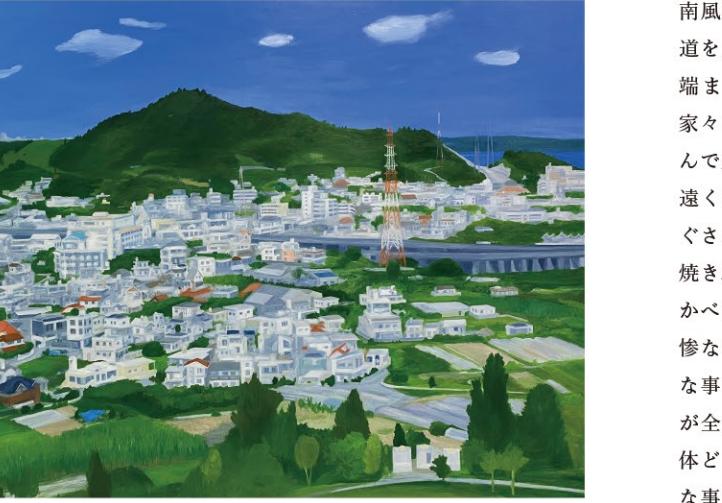


石垣克子



Katsuko Ishigaki



黄金森公園からの眺め 2022年 130.3×162 cm キャンバスに油彩

1967年 石垣市に生まれる。

1991年 沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科専攻卒業。

グループ展：2021年「琉球の横顔」（沖縄県立博物館・美術館）、2020年「沖縄アジア国際芸術祭」（那覇市民ギャラリー）、

2019年EAPAP東アジアピースアートプロジェクト（済州4・3平和記念館）、2019年マブニピースプロジェクト（平和祈念公園）、

2018年「今もやれています」（あざみ野市民ギャラリー）

個展：2022年「南の景から」（ギャラリーアトス）、2021年「その時々の眺め」（rat&sheep）、2019年「基地のある風景II」（eitoeko）。温かな色彩の人物像やコルク作品の他沖縄の今ある現風景や日常の風景の中に基地を描いたシリーズがある。

泉川のはな



Nohana Izumikawa

ある時、港に停泊する大型クルーズ船を見に行った時、その大きさに驚きつつも、大海を往来する唐船を見に、多くの人々が描かれた屏風絵を思い出した。当の人々も私のように、それがもたらすものについて思いを巡らせていたのかもしれない。琉球王国時代の貿易港としての賑わいと、観光需要の増加がもたらした現代の風景にどこか重なりを感じつつ、軍港や観光資源としての「沖縄らしさ」が溢れるイメージを《琉球交易港図屏風》に重ねて描いた。

画家。1991年沖縄生まれ。2016年大学院修了後、山形、沖縄と拠点を移しながら絵画を中心に制作活動を続ける。出身地である沖縄をテーマに、過去の写真資料をもとに現代の沖縄風景を表現したコラージュ作品、南国植物をモチーフにしたドローイングなどを制作。複数の視点で構成する手法や、いかにも沖縄らしいありふれたモチーフを使用することで「オキナワ」というイメージの持つ虚実について考察する。近年の主な活動として、ホテルアンテルーム那覇にて二人展「しまをかく、しまにあう」（2021）沖縄県立博物館・美術館にて「琉球の横顔」（2021）、上野の森美術館にて「VOCA展 2022 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」など。



Nohana Izumikawa



Nohana Izumikawa

「復帰」後 私たちの日常はどこに帰ったのか展

1972年5月15日に沖縄が日本復帰をして今年で50年を迎えます。復帰当時年間44万人だった観光客数は、2019年に1000万人を超え、国内のみならず海外でも人気の高い観光地となりました。そのためリゾートホテルの乱立、高速道路の開通など、この50年間で沖縄の風景は一変しました。

一方、沖縄県民が日本国憲法9条のもと、負担軽減が解決できると熱望した米軍基地は、いまだに居座り続け、在日米軍基地専用施設の約70%が国土面積0.6%の沖縄に集中し、自立的経済発展を阻害し続けています。さらに「沖縄の自己決定権」は、日米政府に踏みにじられたまま全く変わっていません。その事に国民全体の意識は全くの無関心で、基地に関係する深刻な諸問題は解決どころか、辺野古への新基地建設、さらに宮古、石垣への自衛隊強行配備によってミサイル要塞化が進んでいます。基地は敵の標的となり、ますます危険性は高まっています。

沖縄に住む者にとって沖縄戦で受けたトラウマは、日常的に再生産され、「過去」は終わることなく「現在」であり続けています。今年2月から始まったプーチン大統領のウクライナ侵攻で子どもの手を引いて脱出する母親たちの姿は、完全に沖縄戦と重なり私たちに深い衝撃を与えています。東京の政治中枢では、「台湾有事」は「日本有事」と呼んでいます。このような情況でこそ、沖縄戦の遺産である「命どう宝」の言葉は、さらに深い哲学となって世界に発信していく思想として再生していくべきものと考えます。

今展では、沖縄で「絵を描くことの意味」を考える展覧会を創りたいと思いました。復帰前後に生まれ、沖縄の社会が抱える問題や激変していく景色のなかに、表現者としてそれぞれの視座をどのように置き、何を見つめているのか。「復帰50年とその先」を多様な視点で考える展覧会となることを願っています。

佐喜眞美術館 館長 佐喜眞道夫

会期中イベント

6月18日(土) 14:00-16:00 (2部構成)

朗読会と朗読劇「にんげんだから」

入場料：1800円(入館料込)

主 催：朗読集団「うおの会」

(共同代表：上江洲朝男、田場裕規、大城貞俊)

後 援：佐喜眞美術館、Kuuの会

お問い合わせ：「うおの会」事務局 098-890-4343(大城)

6月24日(金) 17:00 開場／17:30 開演

右田隆ひとり芝居

「九条への生還 Return to Article 9」

入場料：入館料でご覧いただけます

主 催：アレン獎学会沖縄

後 援：佐喜眞美術館

お問い合わせ：アレン獎学会沖縄 090-8291-7134(宜野座)

6月23日(木)

慰霊の日 ※この日は日没まで開館します

8月6日(土)

松田奈緒美ソプラノリサイタル「レクイエム」(仮)

※時間入場料等詳細につきましては、佐喜眞美術館 TEL098-893-5737 または当館HP、Facebook等で告知いたします。

その他、関連イベント予定。当館HP、Facebook等でご確認ください。



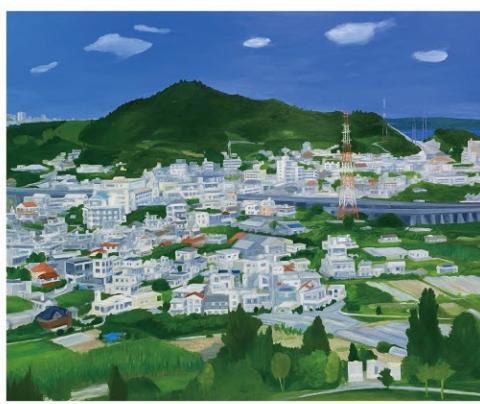
〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原358
TEL 098-893-5737 FAX 098-893-6948

HP

QR

QR

Facebook



「復帰」後 私たちの日常はどこに帰ったのか 展

展

与那覇大智
仁添まりな
坂田清子
喜屋武千恵
儀保克幸
宇良京子
泉川のはな
石垣克子

2022年6月17日(金)-9月11日(日)



佐喜眞美術館

常設展示：丸木位里・丸木俊「沖縄戦の図」

宇良京子

Kyoko Ura

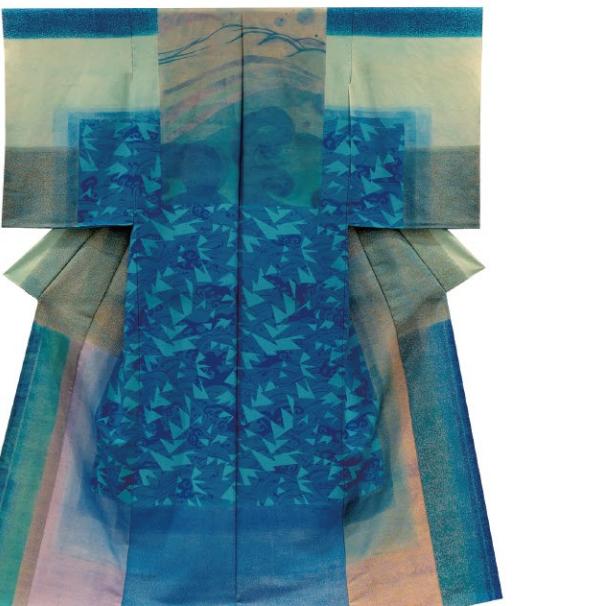


布に色と形を留めるために経る制作プロセスは、素材との対話と水の作用から素材そのものを隠蔽、変質させることなく表現に至り呼吸する一枚の布になります。

「海」は、沖縄の情景をモチーフにイメージし制作しました。

海、空、地をまとうその人が立つことにそっと寄り添うことができればと思います。

美術性を持った染色表現を目指す中、いつかそこに風土が立ち上がって欲しいと思い制作しています。



海 2018年 178×134 cm 染色(型、糊防染／絹、酸性染料)

1975年 沖縄県那覇市生まれ
2001年 沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科 生活造形専攻染織専修了

主な美術館
2021年 テキスタイルの未来 in 宝塚2021(宝塚市立文化芸術センター／兵庫)
線の誘惑 型染展(染・清流館／京都)
2019年 個展(ギャラリーH2O／京都)
個展(ギャラリーアトス／沖縄)
2016年 SOME- 染色のDNA-(染・清流館／京都)
2014年 「WAFITTING:DYE AS INK ON FABRIC」(MediaLab Gallery/ ニューヨーク)

喜屋武千恵

Kyan Chie



白澤(はくたく)とは、古代中国に伝わる瑞獸である。人のことばを話し、その9つの目で世の中を見据え、平和な世になるよう為政者にアドバイスするといふ。かつて、北斎や琉球の絵師であった自了(城間清豊 1614~1644)など、様々な絵師によって描かれてきた。

今もなお世の中は争いが絶えず、大切な命が失われている。白澤は、平和を希求する私たち一人一人の中にいる。

白澤に、平和への祈りを込めて。



白澤の図 2019 194×130 cm 紙本彩色

1969年 沖縄県生まれ。画家
現在、沖縄を拠点に創作。命をテーマに、平和への祈りを込めて描く。沖縄の赤土や天然顔料を用いて創作。
琉球(沖縄)にルーツをもつ新しい表現を模索している。
受賞歴、1994年「川端龍子賞展」(優秀賞)、1997年
田中一村記念第1回「奄美日本画大賞展」(入選)、
2020年 第54回沖縄タイムス芸術選賞 絵画部門(奨励賞)など。
主な展示会に2012年 第8回「菅原彥大賞展」／京都
文化博物館・倉吉博物館、2021年 琉球の横顔-描かれた「私」からの出発-展／沖縄県立博物館・美術館など。
他個展、グループ展多数。

仁添まりな

Marina Nizoe



(撮影者:高野大)



百年越しの彼誰 2019年 119×172 cm 紙本彩色

オオサイチョウというサイの角のように大きく特徴的な嘴を持つ鳥が、水が満ちた翡翠でできた水甕から生えたテッポウユリを見守っている。傷付き、時に失われながらも再興してきた沖縄の人々の心の有り様を描きたいと思い、描いた作品である。

儀保克幸

Katsuyuki Gibo



1972年、沖縄が本土復帰の年に私は大阪から沖縄へ帰ることになった。帰省の船から見る沖縄は、今にも沈みそうで不安だった幼少期の思い出がある。祖先を敬う珊瑚礁の島でかつて鉄の暴雨風が襲う歴史を知る。戦争を体験した父がよく「ゼロからの時代」と言って何もなくなった戦争直後の写真を見せることがあった。丸裸の大地に転がる石灰岩のかけらを見ながら、何者かの気配を感じることがある。無言の島から発せられる声に耳を傾けながら孤独な島をイメージした作品です。



Remembering childhood dream
2017年 30×30×41 cm 木

阪田清子

Kiyoko Sakata



雪道で落とし物をしてはいけないよ。もう二度と戻っては来ないから。- キラキラと光る海面の様子に雪景色を重ねながら、幼い頃に教わった母の言葉を思い出した。

今回の制作は、海水を汲んで塩の結晶を作るところから始まっている。生命の源から作り出されたそれらは、死者が眠る墓標のようでもある。また、写真や手紙の上に結晶を置いていく行為は、他者の記憶との対話であり、もう二度と戻っては来ないものたちへの祈りでもある。



思い出せない言葉 2018年 可変 塩の結晶、手紙、葉書、写真

1972年 新潟県生まれ、沖縄県在住。美術家。沖縄県立芸術大学美術工芸学部准教授。
「不確かな立ち位置の集合体」をテーマに、家具や日用品・自然物などを素材として用い、日常を問いただすインスタレーション作品を発表。近年の主な美術館に、「Sugar and Salt」SoolSool Center (2021/ 韓国)、「Imagine vol.2 自然の声を聞く」rat & sheep (2021/ 沖縄)、「ゆきかよう舟」ホテル アンテルーム那覇 GALLERY 9.5 NAHA (2020/ 沖縄)、「Present Passing: South by Southeast」Osage Gallery (2019/ 香港)、「新・今日の作家展 2018一定点なき視点」横浜市民ギャラリー (2018/ 横浜)、「水と土の芸術祭」ゆいぱーと (2018/ 新潟)、「開館10周年記念展『邂逅の海-交差するアリズム』」沖縄県立博物館・美術館 (2017-18/ 沖縄)

与那覇大智

Taichi Yonaha



HOME-HENOKO-INVICTUS 2019年 210×410 cm キャンバスにアクリル

2018年12月14日、辺野古への土砂投入の報道をきっかけに描き始めたのが「HOME-HENOKO-INVICTUS」だ。今起きている出来事を越えて、その背景にある歴史に向かい合応答するように描いていった結果、抽象的になっていった。

画面に見える墨の滲みの様な効果は、「沖縄戦の図」に思いを寄せながら描いた。

1967年 沖縄生まれ
1990年 沖縄県立芸術大学美術工芸学部卒業
1993年 筑波大学大学院芸術研究科修了
2005年 文化庁在外派遣研修員として米国・フィラデルフィアに滞在
発表歴
2010年 「沖縄プリズム」(東京国立近代美術館)
2016~19年 「マブニ・ビースプロジェクト沖縄2016」(県営平和祈念公園)など。
個展多数。
近年は韓国との交流展や「沖縄も私一つながっていることつなげること」展など美術館の企画にも参加。